

平成18年度大学図書館近畿イニシアティブ基礎研修

「初任者研修」参加報告

松岡美佳

平成18年11月21日(火)から22日(水)の二日間にわたって、「平成18年度大学図書館近畿イニシアティブ基礎研修『初任者研修』」に参加する機会をいただいたので、ここに報告する。

研修スケジュールは、表1のとおりである。また今回の実施組織である「大学図書館近畿イニシアティブ」(略称「近畿イニシア」)については、表2、表3を参照願いたい。

I はじめに

「インターネット」や「電子メール」という用語がまだ世間には普及していない頃に図書館を離れた私は、長い空白期間を経て、昨年再び「本の世界」へ戻ってきた。しかし図書館はもはや「資料」イコール「紙」の世界ではなく、様々な媒体(CD-ROM、DVD-ROM、インターネット等)に様変わりしていた。日進月歩する物体であった。

ユーザーにとっても、パソコンの前に座り、検索エンジンにキーワードを入力すれば、ある程度の情報はすぐさま入手できる。いやむしろ取捨選択に悩むかもしれない。図書館へわざわざ足を運ばなくとも、ホームページを入口として、世界中の蔵書の所蔵検索や判例の検索も可能である。探している論文は電子ジャーナルで読める。

このような状況に直面して、今一度初心に戻り、最近の図書館事情を把握するために、今回の初任者研修に臨んだ。

II 研修内容について

基調講演に始まり、ゲスト講演と班別討議、研修(講義)が二日間合わせて6つあり、非常に密度の高い「初任者研修」であった。

以下、各研修内容について、概要を紹介する。

【表1】

月日	時間	内容	講師等	
11月21日(火)	9:30~10:00	受付	専門委員会、運営委員会	
	10:00~10:10	開会、主催者挨拶	司会者、運営委員会委員長	
	10:10~11:30	講演「今、大学図書館職員に求められているものは何か」 (休憩)	有川節夫(九州大学)	
	12:40~13:40	研修1「資料収集業務」 (休憩)	赤崎久美(大阪府立大学)	
	13:45~14:45	研修2「目録・分館業務」 (休憩)	新藤一夫(京都大学)	
	14:55~15:55	研修3「閲覧・ILM・レファレンス業務」 (休憩)	有川浩(関西学院大学)	
	16:00~16:30	ゲスト講演「最近の学術情報の動向について～電子時代における図書館と出版社の新しい関係～」 (休憩・移動)	高橋昭治(エルゼビアジャパン)	
	17:20~18:00	情報交換会	講師、専門委員会、運営委員会	
	11月22日(水)	9:30~10:00	受付	専門委員会、運営委員会
		10:00~10:05	開会	司会者
10:05~11:05		研修4「雑誌業務(電子ジャーナルを含む)」 (休憩)	幸島裕(近畿大学)	
11:10~12:10		研修5「情報リテラシー教育」 (休憩)	多田真紀子(神戸大学)	
13:20~14:20		研修6「図書館からの情報発信」 (休憩・移動)	渡邊昭弘(信州山手学院大学)	
14:40~16:00		班別討議「図書館員としてのスキルアップを図るにはどうするか」 (休憩・移動)	講師、専門委員会	
16:30~17:20		班別討議発表(班ごとに講師・研修者からコメントをもらう)	各班代表者、講師	
17:20		閉会	司会者	
17:20~18:00		(図書館員等、希望者のみ)	関西大学図書館	

会場：関西大学図書館

1 講演「今、大学図書館職員に求められているものは何か」

九州大学理事・副学長・附属図書館長
有川 節夫氏

有川館長に対してあらかじめ主催者から、

- (1) 大学図書館職員に求められている資質や要件等を列挙、解説し、今後の大学図書館職員が進むべき方向性を示唆する。
- (2) 大学内における他部署職員との相関(力)関係や社会貢献に関わる大学図書館職員のあるべき姿、国際化時代における職員のあり方などにも触れる。

という要請があったとのことだ。

この二点について、「平成10年から約9年間に取組んできた九州大学附属図書館の一連の改革を紹介し、それを通じて与えられた課題に応える」という形をとられた。

第一に、九州大学附属図書館では、理念・目標・計画を明確に設定した。第二に課題解決のための基本方針を打ち立てた。そこでは「学習・教育・研究」という優先順位をとり、学生のための図書館、学生の立場に立つことを重視した。

九州大学における具体的な活動としては、①分館の設置、②学習図書館としての機能整備、③研究図書館機能の整備・充実、④電子化図書館機能の整備・充実、⑤書誌情報データベースの整備、⑥Web上の学術資料を対象とした参考調査業務の支援、⑦図書館組織の機能化、⑧教育・研修制度について、⑨蔵書構築要綱等の制定、⑩財政基盤の確立、⑪情報基盤センターとの連携である。

法人化後の改革としては、①九州大学附属図書館の組織改革、②文部科学省での検討の二つをあげられている。①については「専門性の育成と人事改革」、「図書館サービスの高度化」について述べられた。

最後にまとめとして、求められる資質は、①専門性と総合性、②IT技術、③交渉・コミュニケーション能力、④国際化対応、⑤研究開発・教育能力とされた。

有川館長自らが図書館の陣頭指揮を取り、戦略的、積極的に学内外へ働きかけておられる懸命な姿勢が、これからの図書館の目指すべき方向なのかもしれない。資料の充実はもちろんであるが、大学内において図書館が占める位置、重要性、果たせる役割の度合いを高めていくことも求められよう。従来の日本の大学図書館は受け身で、来館する利用者に対してどのようなサービスを提供できるかに粉骨砕身していたように思われる。

2 研修1「資料収集業務について」

大阪府立大学学術情報センター
赤崎 久美氏

赤崎講師の講義内容は、①資料収集業務（収集方針、選書、発注、納品・検収、支払、登録）、②大阪府立大学の場合であった。ホームページに公開されている他大学図書館の収書方針の紹介や選書ツールの話が参考になった。

また大阪府立大学では①すでに大阪府民に図書館を公開していること、②司書による人文社会・自然科学グループの分野別選書できめ細かな対応をとっていること、③選書会議では現物を取り寄せて、購入を決定していること、④学生選書会議があること。学生選書委員（10名程度）の募集を行い、ジュンク堂大阪本店で店頭選書を行っていること。（後援会の寄付金を充当）、⑤学生選書コーナーの棚を設けているなどの取り組みが印象に残った。

3 研修2「目録・分類業務」

京都大学附属図書館情報管理課
図書情報掛長 那須 一夫氏

主な講義内容として、①図書館の目録の種類、②目録情報の構成、③目録作成のためのマニュアル類、④目録業務の変化、⑤受入から利用までの流れ、⑥分類について、⑦NACSIS - CAT、⑧総合目録データベースの現況、⑨国立情報学研究所の対応である。

上記④目録業務の変化について、那須講師は、

(1) 各館個別の目録作業から集中・共同目録作業へ

(2) 冊子体・カード目録からコンピュータ・オンライン目録へ移行する現況

をあげ、書誌ユーティリティを利用したオンライン共同分担入力方式による総合目録データベースの構築、すなわちNACSIS - CATの特徴について説明があった。

各大学図書館は、総合目録データベースのデータをダウンロードすることで、個々の蔵書目録データベースを構築していく時代になったというのである。

平成17年度末、上記参加機関数は1,145機関、図書所蔵登録件数（累積数）は約8,295万件、一日当たり登録件数は図書書誌約2,000件、図書所蔵約25,000件とのことである。

ところが、参加機関数の増大、外注業者による目録入力増大で、図書書誌重複レコードの増加、雑誌所蔵レコードの未更新などの問題が派生している。那須講師は今後の課題として、共同分担入力による目録業務の負担軽減と簡略化、すなわち①目録担当職員の減少と非常勤・外注・派遣の投入、②目録作成能力の維持・継続が低下、③人員確保と育成方針（研修・教育体制）の確立の必要性をあげている。さらに図書館共通の問題としては、言葉の壁（外国語、特に東南、南、西アジア諸言語）、和古書の整理であった。

【表2】

『大学図書館近畿イニシアティブ』(近畿イニシア) : 地域で実施する共同事業の展開を目指して

【近畿イニシアとは、何ですか?】
平成17年4月、近畿地区で発足した大学図書館の地域共同事業組織「大学図書館近畿イニシアティブ」(Kinki Region Academic Libraries Initiative →KRLI)の総称です。
近畿地区にこれまでなかった国立・公立・私立の大学図書館を網羅した協力組織として、国立大学図書館協会近畿地区協会、私立大学協会図書館協会近畿地区協議会、私立大学図書館協会近畿地区協会近畿地区協議会及び近畿地区協議会の4団体は、設置形態の違いを超えて共同で事業等を実施するための発足しました。関係大学は、13の大学になります。
組織の改編を決定し活動の方向性を明確にするための設置委員から選出された3期からなる運営委員会と、具体的な事業を推進していくための2つの専門委員会として、地方開発専門委員会と広報・総務専門委員会を設置しています。

【近畿イニシアの活動内容はどのようなものですか? また、今後の計画は?】
近畿イニシアは、共同で地域で実施できること一歩止って実施していくことを目的に設置されました。現在は地方開発事業が活動の柱となっており、地方開発専門委員会が中心となって、近畿地区の大学図書館職員の実践向上のための必要な研修等の地方開発事業を実施しています。これまでに数回3年未満の業務研修会を開催したほか研修員と加盟校との共通の形で大学図書館職員向けの講演会なども開催しました。今後の研修が単に研修員だけでなく加盟校を研修とした研修会等も順次企画実施していく予定であるが、協議が整えば構成団体等での事業企画や実施への参加も積極的に展開して、近畿地区での各種事業の一歩止を推進していきます。なお地方開発等の主要事業については、各団体に連携のない協力校にも関係しています。

【近畿イニシアの活動は、どこで統合されていますか?】
近畿イニシアは「大学図書館近畿イニシア」において運営統合しています。また、ネットを基盤としたホームページでもお知らせしています。後者は近畿地区の加盟校だけでなく、近畿イニシアの概要や各種会議の議事録、アンケート調査の結果の集計についても運営しています。
① <http://www.krl-i.org/>
この近畿イニシアの加盟校に対しては、加盟の連絡やホームページの更新などのお知らせをメールマガジンにより通知する事業を進めています。

【表3】



4 研修3 「閲覧・ILL・レファレンス業務について」
関西学院大学図書館利用サービス課
業務主担当副主査 有川 浩氏

ここでは、①閲覧業務(概要、課題)、②ILL業務(概要、資料閲覧、文献複写、図書貸借、課題)、③レファレンス業務(概要、参考図書、データベース、課題)の講義であった。

パブリックサービスについて、全般的な業務の流れを把握することができた。

他大学図書館の見学は可能とはいえ、なかなか日常業務の詳細や各館の取り組みについて具体的な話を伺うことは困難である。今回はよい機会となった。

5 ゲスト講演「学術情報流通の最新動向～図書館と出版社の新しい関係」

エルゼビア・ジャパン株式会社

マーケティングマネジャー 高橋 昭治氏
トピックは、①エルゼビアのジャーナル出版の現状、②冊子体から電子ジャーナルへの移行による変化、③新しい出版(流通)形態、④図書館の新しい役割であった。

電子ジャーナル普及以前に図書館を離れていた私は、形のないものに対する不安が付きまとう。「電子ジャーナルへのアクセス保証」として、エルゼビアでは、キャンセルした場合、①ScienceDirectのカレント年の契約を継続する限り、キャンセルした

個別タイトルへのアクセスを保証、②ScienceDirectのカレント年契約を中止した場合は、年間アクセス料金を支払うことにより、継続してアクセスあるいはデータをテープで提供という形をとっていることである。

また、「電子ジャーナルの恒久的アーカイブ」として、エルゼビアでは、①1999年にScienceDirectの電子データを恒久的に保存することを契約書に明記、②技術の進展に伴うファイル形式の移行を保証、③エルゼビアが万一データを保存できない事態になった場合には第三者にデータを委託するとのことだ。

「新しい出版(流通)モデル」では、「インターネットによって従来の出版モデルに依存しない出版(流通)が可能になった」とし、①オープンアクセス出版(オープンアクセス雑誌、ハイブリッドモデル、出版後一定期間後の無料公開)、②オープンアーカイブ(機関リポジトリ、分野別リポジトリ)という動向をあげられた。

「機関リポジトリ」という言葉は、今回の研修でも度々登場したキーワードの一つである。これは講師によると①国内外で、機関の研究成果を機関リポジトリに搭載しようという動きが活発になっている、②その対象として査読論文も重要な搭載コンテンツの一つであるということだ。

多くの出版社は、機関リポジトリへの論文の著者版(出版社版の場合もあり)の搭載を認めている。

しかし、出版社の搭載に関する方針は千差万別であろうから、機関リポジトリ搭載には、ケースバイケースの複雑な手続きを踏まねばならないことが予測される。

あくまでも「利潤」追求の企業（出版社）と文化的資源の保存、利用、提供を使命とする図書館（大学、諸機関）が、今後どのように提携して、「情報」を構築していくのかが、大きな課題となるであろう。

6 研修4「雑誌業務について（電子ジャーナルを含む）」

近畿大学農学部事務部

図書館事務課長 牛島 裕氏

ここでは、①「雑誌」の定義に始まり、②形態、③選定、④購読（発注、契約、リニューアル、支払、寄贈）、⑤受入、⑥目録、⑦諸業務（統計、調査等）と雑誌業務一連の講義であった。

前述のエルゼビア・ジャパン株式会社の高橋氏も話されたが、1980年から1990年代の「シリアルズ・クライシス」一雑誌の価格値上げ⇒図書館予算の低迷⇒購読数減少⇒価格値上げに続き、さらに電子ジャーナルシステムの開発、運用経費の加算などが、逐次刊行物の世界では深刻となっている。

限られた予算で、研究に必要なタイトル数の維持を前提にいかに対策を立てるか、外部資金の獲得など、牛島講師の憂慮されている問題は、図書館共通の懸案事項である。特に洋雑誌の購読については、コンソーシアムへの参加など、図書館員の交渉力と手腕が試される時でもある。

7 研修5「情報リテラシー教育」

神戸大学附属図書館情報サービス課

情報リテラシー係 多田 真紀子氏

講義項目は、①情報リテラシーとは？ ②図書館にとっての情報リテラシー教育の意義、③利用者にとっての情報リテラシー教育の意義、④図書館と利用者の要望を適合させるには？ ⑤情報リテラシー教育の実践、⑥事例報告、⑦それぞれの情報リテラシー教育の充実に向けてである。

中でも、神戸大学における情報リテラシー教育の計画、準備、実施、反省に至る一連のシステム化された流れと図書館員の熱意には感嘆する。

神戸大学では、授業「情報基礎」（コンピュータリテラシー）6回のうち1コマ（40分の割当）が図書館に任されているとのことである。

京都大学も同様に、教員と図書館員の連携で、授業「情報探索入門」（全学共通科目）が行なわれているとの紹介があった。

多田氏は最後に「大切なのは情報リテラシー教育は、安定かつ信頼のおける図書館サービスが培われていてこそ、意味のあるもの」、「必要なことを、必要なときに、効果的な方法で、それぞれの図書館によって、違っていい」、「一人で頑張らない。他の図書館員、教員などと連携をとって、チームで作り上げていこう」と述べられた。

各大学の「情報リテラシー教育」に対する方針は異なるであろうが、「情報」を扱う図書館から各学部（大学当局）に対して積極的に働きかけてもよいのではないかと考える。

8 研修6「図書館からの情報発信」

帝塚山学院大学

渡邊 隆弘助教授

講義項目は、①大学図書館の「情報発信」とは、②図書館wwwサイト作成の留意点、③図書館所蔵資料による情報発信、④学内研究・教育成果の情報発信である。

ここで、渡邊先生はなぜいま「情報発信」なのかということ、①インターネットの時代＝オープンな情報環境、②厳しい大学経営と「改革」の時代、③求められる社会貢献・地域貢献という理由をあげられた。

また「情報発信の目的」として、①図書館利用の開拓・拡大、②組織としてのアカウントビリティ（学内・学外）、③広く社会に貢献、としている。

本研修でも度々使用された「機関リポジトリ」について、ここで明快にまとめられているので引用しておく。

(1) 機関リポジトリの背景

- ア オープンアクセス運動
- イ 研究者・大学の社会的責任
- ウ 大学の広報戦略

(2) 機関リポジトリを作るには

- ア 入れるべき素材
- イ 入れることのできるもの：権利関係
- ウ 必要なデータ
- エ システムの構築
- オ リポジトリを成功させるには
査読論文も含む。使われる、高品質のリポジトリ、大学としての明確な熱意

カリポジトリの可能性

ユニークデータとして意味がある。「セルフ」アーカイビングだから競合しない。

- (3) 意志決定は大学全体でおこなうべきこと、情報アクセスを担う組織として、図書館が担うこと、図書館に対する信頼が問われている、としている。

9 班別討議「図書館員としてのスキルアップを図るにはどうするか」班別討議発表

ここでは、主催者側の「講義を聴くだけの一方通行の研修ではなく、受講者の皆様が主体的に参加される研修にすることを意図して設けられた」という趣旨による。

事前に64名の参加者を5班に分け、役割分担(司会、提案、記録、発表)が決められていた。さらに応募用紙提出の際に記入した「自己紹介」、「『図書館員のスキルアップ』について、実践していること、考えていることなどを記入ください」という項目をグループごとにピックアップした資料が、第一日目に配布された。各グループには、講師と研修の運営委員が入り、アドバイスをいただいた。

私は第4班の司会担当であった。出席者は正職員、派遣職員など様々な雇用形態であり、職歴も図書館とはまったく異なる部署からの異動者など、出席者の多様性が特徴であった。

最後に班別討議発表があり、班ごとに担当講師からコメントをいただいた。ここでは紙幅の関係で、討議内容は省略する。

Ⅲ 最後に

- (1) 本研修では、国立・公立・私立大学の各分野で経験豊富な講師に、集中的にテクニカルからパブリックサービス全般の講義を受けることができた。単なる図書館・情報学の講義ではなく、現場に密着、実情に即応した内容であった。今の図書館の状況や課題、図書館を取り巻く情勢がどういふものかを鳥瞰することができた。
- (2) 事例がいくつも紹介されたこと、将来の指針、参考文献も提示され、今後の業務に大いに活用できる。
- (3) 資料として、研修内容のプレゼンテーションを複製した冊子が配布されたので、研修後も繰り返し目を通すことが可能である。

(4) 事前に、参加者に対して、応募用紙の提出があり、綿密な準備がなされていた。応募用紙には、要望・質問事項等の記入欄があり、講義はそれらをも反映して、質問に対して何らかの回答が示された。

(5) 近畿イニシアの発足の主旨(表2)を大いに生かしたものであり、国立・公立・私立大学図書館が一堂に会して、講師も、出席者の所属も多種多様であるというのはこれまでになかった試みである。

(6) 他大学の現況は大いに参考になり、あらためて自館を客観視することができた。

(7) 前日に情報交換会を開催した際、翌日の討議班別テーブルを設定し懇親を図るなど、研修全体について言えることだが、人的交流も意識したきめ細かい配慮がなされていた。

(8) 今後、今回の研修内容別(パブリックサービス別、テクニカルサービス別、さらに細かく業務別)に分科会を作り、定期的な情報交換会、研究会の開催や、メーリングリストができればよいと考える。

しかし、組織が大きくなればなるほど、活発な活動は困難を伴い、事務局、運営委員会、委員館へ極度の負担がかかることは避けなければならないであろう。

(9) このような有意義な研修を、さらに図書館に関わる多くの人に受講してもらいたいと願う。そのためには、たとえば①本学の大学院(総合情報学研究科)で双方向TV会議システムによる遠隔授業を行なっているように、他のキャンパスあるいは大学間で接続して、同時に双方向でこの研修を受講できるようにする、②録画を撮り、各大学で研修の一環として利用することなど、「近畿イニシアの資源」の活用が望まれる。

研修を終えて、この10年間に、これだけ劇的な変化が図書館に起こっていたことにあらためて驚嘆するばかりである。20年以上昔、「paperless」という言葉が新鮮な時代、現代の図書館の姿は想像すらできなかった。

今の図書館に求められているのは「大学(あるいは社会一般)における『図書館』の有用性・必要性が自明であった(という希望が持てた)時代はすでに終わりつつあるといえるかもしれない。今、図書館にとって必要なものは、『図書館とは何か』を説

明（あるいは説得）できる理念（理論）であろう」⁽¹⁾、「…大学改革が要請する教育と研究の改善を実現するためには、大学が改革されることを待ってはいけないのであり、大学図書館が教育と研究の環境を改革していくことが不可欠である」⁽²⁾、「…少子化、学際化、国際化、財政緊縮、評価活動、競争的資金の導入といった大学をめぐる環境の変化が、大学図書館のマネジメント面での変革を求めているようにも感じられる」⁽³⁾であり、「…図書館は学術コミュニケーションにより深く寄与することができる。また、このような公共的な知の基盤作りという、図書館にしかできない事業に取り組むことは、学内的にも社会的にも図書館の存在感を高めることに繋がり、その経験を活かして次の展開を検討することも可能となるだろう」⁽⁴⁾、「大学で生産される研究成果等、学術情報の適正な管理と広範な公開・発信は大学にとって必要不可欠な施策である。大学図書館がそのことに積極的に関与し、また主導していくことにより大学の教育研究活動の高度化と管理運営の効率化に貢献していくことは、大学図書館にとって新たな役割を担っていくことによって大学での存在意義を高めることになる」⁽⁵⁾が図書館の進むべき道を示唆しているように思われる。

昨年8月に再び図書館の所属となったものの、昔の面影を残した法学部資料室の業務に携わっており、現状では総合図書館とは一線を画している。このような事情もあり、今回の研修に対してさらに持論を展開するレベルにはいまだ到達しておらず、以上の報告にとどめることをお許し願いたい。

最後に豊富な人材と資源を擁した「近畿イニシア」のますますの発展を祈るとともに、今回の研修参加にあたり、ご配慮くださった図書館ならびに法学部資料室の皆様、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

以上

[引用文献]

- (1) 野末 俊比古 “第4章 大学図書館と情報リテラシー教育 — 「指導サービス」の意義と展開—”『変わりゆく大学図書館』（逸村 裕、竹内 比呂也編）東京、勁草書房、2005年、p.54
- (2) 土屋 俊 “第2章 現代日本の大学改革と大学図書館”『変わりゆく大学図書館』（逸村 裕、竹内 比呂也編）東京、勁草書房、2005年、p.28
- (3) 逸村 裕、竹内 比呂也 “はじめに”『変わりゆく大

学図書館』（逸村 裕、竹内 比呂也編）東京、勁草書房、2005年、ii

- (4) 筑木 一郎 “英国における機関リポジトリの動向—電子学位論文プロジェクトを中心として—”『情報の科学と技術』Vol.55、No.10、2005年10月、p.431
- (5) 郡司 久 “名古屋大学における学術機関リポジトリ構築への取り組み”『情報の科学と技術』Vol.55、No.10、2005年10月、p.445

[参考文献]

- (1) 影山 幸子 “私立大学図書館コンソーシアム（PULC）の形成に関わって”『関西大学図書館フォーラム』第9号、2004年6月、p.10-17
- (2) 栗山 正光 “総論 学術情報リポジトリ”『情報の科学と技術』Vol.55、No.10、2005年10月、p.413-420
- (3) 時実 象一 “オープンアクセス運動の歴史と電子論文リポジトリ”『情報の科学と技術』Vol.55、No.10、2005年10月、p.421-427
- (4) 高木 元 “研究者にとってのセルフアーカイビング”『情報の科学と技術』Vol.55、No.10、2005年10月、巻末1-巻末4
- (5) 米澤 誠 “図書館ポータルの本質：多様なコンテンツを生かす利用者志向サービス”『情報の科学と技術』Vol.55、No.2、2005年2月、p.56-59
- (6) 木下 聡 “三重大学附属図書館のポータルデスク”『情報の科学と技術』Vol.55、No.2、2005年2月、p.60-64
- (7) 逸村 裕 “機関リポジトリ” [参照2007.2.20]
(URL http://www2.itc.nagoya-u.ac.jp/pub/pdf/pdf/vol05_02/101_105campus02.pdf)
- (8) 国立情報学研究所 “日本最大の学術電子ジャーナルアーカイブの実現—大学図書館と連携して610万論文に—” [参照2007.2.20]
(URL http://www.nii.ac.jp/kouhou/NIIPress06_3-1.pdf)
- (9) 土屋 俊 “SPARC の理念と機関リポジトリ” [参照2007.2.20]
(URL http://cogsci.l.chiba-u.ac.jp/~tutiya/Talks/102706InternetPublishingAndLibrary_full.pdf)
- (10) 逸村 裕、竹内 比呂也編『変わりゆく大学図書館』東京、勁草書房、2005年
- (11) 大学図書館近畿イニシアティブ [参照2007.2.20]
(URL <http://wwwsoc.nii.ac.jp/initia/index.html>)

（まつおか みか 図書館事務室）